

山と博物館

第37巻 第9号 1992年9月25日

大町山岳博物館



「下の廊下」を行く 写真と文 上條光則

黒部溪谷、下の廊下を歩いたのは、今から五年前、昭和六十二年十一月のことです。

誘って下さる方があって、随分ためらいましたが、思い切って老骨にムチ打って、妻も一緒に行くことに決心しました。

一行は男性二人、女性四人の計六人。ガイドをして下さる方は、山の大ベテランの楢さん。二人の女性もベテラン級。私共夫婦と一人の女性は、山育ちとは言え、ずぶの素人。

全く、今にして思えば、良くぞまあ行って来たものよと、当時の写真を見ながら、つくづくと有難く、無事に行って来たことを、楢さんをはじめ皆さんに感謝するばかりです。

下の廊下は、今さら私が説明するまでもなく、黒部ダムの下流、黒部川に沿って旧日電歩道を下るコースです。ガイドブックには、難コースの一つとして紹介されています。ベテランのガイドが着かないと危ないとも言われている秘境です。それに天候にも大変左右されます。

十一月四日、曇りがちだった空も、トンネルを抜ければ、そこはもうカラカラの上天気!! 切り立った断崖!! 下を見れば百メートル以上はるか真下に逆巻く黒部の激流!!

一歩でもあやまれば、それで万事終り!!。数十センチしかない細い道を、鉄の鎖にしつかりつかまりながら、ゆっくりゆっくり歩いて渡って行くのです。

楢さんは、歩き初めに細かく注意して下さいましたが、その中のひとつは、「下を見る時は、歩きながら見ないで、必ず立ち止まってから見るようにして下さい。」

本当に有難く大切なことと体感しました。白竜峡・十字峡・半月峡・S字峡・等々、行く程に歩く程に、正に峡谷美の極み!!

写真は、白竜峡のあたりだったと思います。山と博物館にちなみ、少し前の写真ですが私の生涯の思い出として。

(大町市在住)

大町市における「講」について

白井潤

今月は講について考察してみたい。その内容を次のように展開したいと思う。

- 一、講といわれるものについての意義規定
- ① 講とは何か
- ② 民俗に於ける「講」の位置
- ③ 講の実態
- 二、大町市における講
- ① 大町にある、またあった講
- ② 特色のある講
- ③ 講の具体例について



大町市内にある庚申塔の例

一、講といわれるものについての意義規定
はじめに、初心にかえて講とは何か、どんなことなのかを、辞書的に解釈してみたいと思う。そうすることによって、逆にはつきりすると思うからである。

辞書によると、大きく分けて二つの意味がある。(一)説く・あげつらう・よむ・はかる・しらべる・きわめる・ならう・ときあかす・平らかにする・主張する、(二)仲をおりする・和解する、などといういくつかの意味があるという。字の右側の「講」というのは、組み合わせるという意味で、左側の「言」は、発言して心を通じ合わせることを表わしている。この両方を合わせると「多くの人が寄って、いろいろな話をするのでお互いの心と心が通じ合う」ことが講という意味になる。

そこで民俗の方でいう講とはどういうことなのかをはつきりさせてみたいと思う。ご存知のように、民俗とは、庶民の民衆の、あるいは大多数の人々の生活の歴史のことであるから、大多数の人々が現在生活しているのは、そのまま親子何代にもわたって受け継いできていることの表現だと思ふ。衣・食・住を中心に、家や人、親せき、近所、町村などのいろいろなつき合いなど、すべて民俗である。そういう中に命題のように「講」がある。「講」には大きく分けて二つある。(一)「信仰を中心とした講」これを更に分類すると、次のようになる。

- ① 在来の民族宗教に支えられたもの
- (イ) 原始的な民族宗教や民間信仰の基盤にたつて結成された講
- (ロ) 地域社会の守り神としてまつられているものが中心に結成されている講

② 専門的な宗教者(例えば僧侶とか神主)などによって組織されているもの

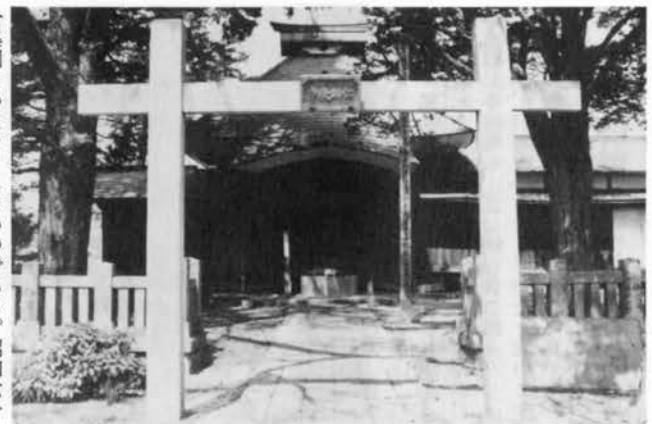
- (イ) 教派としての神道にもとづく講
- (ロ) 仏教のいくつかの宗派による講
- (ハ) キリスト教などにもとづいた講
- (ニ) 「経済的な目的を持った講」

(イ) 物資の融通や、金融を主な目的としたもので、普通には無尽講などといわれてきたもの

(ロ) 協同労働や労力の互助など(ユイ)を主な目的としたもの

講

講を総括してみると、何かしようとその願いや志を同じくする者が自主的に相寄って結成する社会集団を「講」というのである。ここで大事なことは、行政からの要請とか、何かの公的機関からの命令とか、強制によってつくられたものではないということである。あくまでも自由意志と志を同じくする者の集団だということである。江戸時代に作られた五人組とか、法律によって定められた町村とか地区とはちがうものである。そうした仲間を作るきっかけとなったものに、宗教的なものと、経済的なものがあるということである。講とはつきりいえるかどうかと思われるものも現実にはたくさんある。道具の協同購入、管理運営とか、家を新築するときなど多くの人が相手伝う。また春さきの農村時代の味噌炊きなどは、志を同じくする者の自主的な社



大町市大原の仁科庚申堂

会集団といえなくもないのである。昭和六十年、大町市政三十周年を記念して編纂された大町市史にも、市内の講の現状についてまとめられたことがあるので、その一部について市史本文には載らなかった講について考察してみたいと思う。

二、大町市における講

① 大町市にある講、あった講
現在宗教色の強い講の中で残っているものに、庚申講、秋葉講、成田講、伊勢講、日待講、山の講、太子講、戸隠講、恵比寿講、観音講、西宮講、豊川講、八幡講、三夜講、三峯講、などが多くの地区で残っているもので、ごく一部で行なわれているものはこの他に十八講くらい報告されている。

②大町市の特色ある講について

先に挙げた如く、数えきれないほどの多くの講があるが、それらの中で、現在もなお行われ、多くの人が仲間に入って続けているものについて紹介し、内容についてはより具体的に写真なども加えて書いてみたいと思う。庚申講と伊勢講の二つについてとりあげてみたいと思う。

イ、庚申講

庚申とは六十日あるいは六十年毎に巡ってくる庚申の時に行うもので、元は中国の道教の思想から発していると言われている。

日本では昔から物事の順序とか年代とか年月を表すのに「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸」の十個の漢字を使って十干と云って、普通に使われてきた。これに更に「子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥」の十二の漢字(ここでは動物の名前)を十二支と云って、先の年度とか月日などを表わしてきた。この十干と十二支を、甲子、乙丑のように順に組み合わせると、六十と十二の最小公倍数の六十に相当して六十までを繰り返すことができる。

この組み合わせのうち、五十六番に庚と申の組み合わせができる。こうした年のことを庚申年と云って、いろいろないわれがある。したがって庚申というの、六十日に一回、更に六十日に一回巡ってくることになる。六十日に一回ということ、年間では六回も巡ってくることになる。この日には庚申仲間の人は、集まって庚申祭りをした。こういうしきたりは、わが国ではすでに平安時代に、貴族の間だけで行われていた。しかしいつの間にか一般の農山村で、庶民の間にも普及したといわれている。庚申というの神なのか仏なのか、どうもはっきりしないもののようにあ

る。地方によっては、作神様と思われているところ、また庶民の健康にかかわる神としていところなど、さまざまだが、いずれにしても恐ろしい神で、この神をおこらせるといふ「祟り」があるといわれて恐ろられてきた。したがって昔から、この神のご機嫌を損なわないように六十日に一度の庚申様の祭りを続けてきたが、近來はこうした信仰面はうすれ楽しみへと変わり、回数も年六回というのはい多いので初めと終わりの二回だけというところもある。

ロ、庚申講 大原町の例

市内大原町の庚申講は十二戸で構成されている。地域によつては五戸であったり、七戸であったりしてこれは決まっているわけではない。毎年六回(昭和五十五年の場合は七回)庚申の日があるが、世の中がだんだんと多忙になり、昔のようにいかになくなり、講仲間の



○庚申講料理覽
天保十五年辰ノ
二月廿三日 庚申
吸物 なし
つけあげ
やきとふ
やしきり
青のり
なし
ふた
観
にんまん
五ぼう
とうふ
あんにん
かんじゅう
青なあたし
大あんつけ
夕めし
ふかけ

江戸時代に行われていた庚申講での料理の内容を示す文書記録 (大町市常盤下一、清水家文書)

「次は講の別な例として、市内社区館ノ内における「伊勢講」について考察してみたいと思う。」
ハ、伊勢講について
社・館ノ内の例
この稿の初めのところで挙げた講の分類の中の(一)信仰を中心とした講のうち地域社会の守護神たる氏神・産土神に対する信仰から成立した氏子祭祀集団としての講である。この

話し合いによつて年三回にし、内容も簡素にしていこうという申し合わせをしてきたが、次第にご馳走の皿数・酒の量などが多くなつてきて、申し合わせたことがくずれてきていふ。昔は庚申仲間としては冠婚葬祭など互いに助け合うことが主なことだった。その中心は葬式の時のお墓の穴掘りなどだったが、火葬をするようになったので、仕事の内容もだいぶ変わつてきている。大原としてはもう一つ大事なことは、什器類を共同で整えて戸々で用意する不経済をなくそうという、互助の心の形となつて表れたものである。これらの共同什器は、ふだん庚申堂の宝蔵庫に保管している。庚申仲間の家で多くの什器の必要が生じたときは、それを持ち出して使いその折りに手入れをしたり、員数を確かめたりした。仁科庚申堂では初庚申の夜「おこもり」の僧侶と年番の夜のおつとめの人たちは、寝もやらず一晩中こもる。初庚申には門戸を開き、本寺の大沢寺住職をはじめ十数名に及ぶ僧侶が集まり、大般若転読会が行われる。これは一地区の例だが、それぞれ特色のある庚申講が方々にある。それらについては市史民俗編にゆずりたいと思う。

講は、講名の頭に諏訪講・八幡講・伊勢講のように、上に神社名や信仰の対象の所在地名などがつくのが特長である。館ノ内の例はこのことがよく表れている。伊勢講とはまさに信仰の対象「伊勢神宮」の信仰を目的とした講である。伊勢神宮は遠く三重県にある歴史の古い神社で、社地区はその信仰にあつてものがあつた。宮本神明宮とのかかりから、宮本神明宮の本宮である伊勢神宮に敬慕の念を抱くのは当然であつた。今の時世なら、伊勢参りなどは自動車で行くなり、電車、バス、または自家用車でそう大げさではなく行けるが、昔は電車、バスなど交通機関などなく、道も整備されておらず、参拝するにも無事帰つて来られるか不安があり、更に旅に要する費用も個人で負担するには荷の重いものであつた。そこで参拝したいという志を同じくする人々が仲間を作つて協力して実現していこうとする集団すなわち伊勢講が成り立つたのである。伊勢講の中にも講の仲間全員が参拝する総参り講と、講仲間の一部代表者がお参りする代参講とがある。伊勢に近い地域では総参り講が多かつたようであるが、信州のような山国で、よそへ出るのが大変なところでは、代参講が多かつた。代参講とはいっても、年に二〜三人ずつ行つたとすれば何年かのうちには大部分の人が行くことになる。いろいろな形式がとられたようである。
このように伊勢講の代参は社地区では曾根原・岡田・宮本・館ノ内など、平地区では中綱・青木・源波なども行われていた。どの地区も大同小異であるが、ここでは館ノ内を例にして、他の地区についてはその都度併記していきたい。講としては任意の集まりであるが、岡田のように全戸加入のところもある。



館ノ内伊勢代参講(大町市社館ノ内)

伊藤真治氏提供

旅は昔は殆ど歩いたこともあり一か月もか
 らいの仕掛けを用意した。
 ぶせ、人が下にはいれるく
 こうして準備万端整えて出
 迎えた。
 まづ下向(代参で伊勢か
 ら帰ることをこう呼んだ)
 したときは産土様に行き用
 意してあった三叉の下に入
 り、火をつけてから、下に
 入った代参人と、迎えに出
 た仲間が同時に「ヤァー」
 という大声とともに外に飛
 び出す。これで代参の役目
 を終り村の人に帰ったこと

ここで代参人を決めて実際に立出、帰郷まで
 のことを順を追ってみることにする。館ノ内
 では「三十人講」とも言い、講仲間は三十人
 で代参は毎年三人である。十年で終ることに
 なるので切り替える。戦時中は危険だったの
 で一時中止したが、その後新規に立てなおし
 た。

予めくじ引きなどで決めておいた人が、仕
 事も一段落し、陽気もよくなる六月中旬頃出
 立したこともあるし、仕事の始まる前に行っ
 た時もあるし、秋の仕事がすべて終わった時点
 で行ったこともある。だが旧正月に行くこと
 ろが多かった。代参人は講員に計画を告げ村
 の産土様に集まり、道中の無事を祈る儀式を
 した。そして産土様の土をお守りとして懐に
 入れた。道中の履き物や着る物、かぶり物ま
 で仲間で饒別の意も加えて持たせたものだ
 いう。小遣銭や旅費は、講仲間の前々から積
 み立てておき、それを主に、家や親族などが
 心配りした。

かかったが、だんだん道などが整ってからは二
 十日くらいであった。しかし人によって旅の
 様子はいろいろであったと言う。旅に出てほ
 っとして遊郭などでくつろぐこともあったよ
 うで、この間の話はたくさんあって、とて
 も紹介しきれないくらいである。

伊勢神宮には内宮と外宮があって、まず内
 宮に行き天照皇大神宮のお札を受けてから外
 宮に参り、豊受大神宮のお札を受ける。三十
 人講なので三十戸分と産土様へ供える分など
 をいただいて帰途につくことになる。直に帰
 る人もあったが、ついでにあちこちを見物し
 て帰るのが普通であった。

代参人が伊勢の旅に出かけている留守中、
 家では藁で人形を作り伊勢の方へ向けて木に
 つるし、朝夕杓子で清水をかけ、無事につと
 めが果せまますようにと祈った。いよいよ帰る
 頃になると講員のところへは通知をし、家で
 は甘酒をかいでふるまいの準備をした。また
 産土様の境内では拝殿の前に木を三本使って
 三叉を作り、その上に藁をたばねたものをか

になると同時に、産土様への告げと、伊勢神
 宮に無事に着いてつとめを果した知らせにな
 るというのである。それから産土様の拝殿に
 上がり改めてつとめを終えた報告と感謝をし、
 道中お守りとして身につけていた「砂」をお
 返しする。代参人の家で用意した甘酒に重箱
 菓子などをふるまった。この席で伊勢神宮で
 受けてきたお札を配り、旅での話をした。ま
 た迎えた仲間も酒などを用意してその労をわ
 ぎらった。

終ると次の年の代参を決める相談をしたり、
 月々の積み立てをどうするかなどを協議した
 後には金を出し合ったが、はじめは物で出し
 合うこともあった。例えば米を何升出すとか
 という方法のところもあった。代参人が家に
 帰り中に入る前に、無事を祈って作った藁人
 形を履いていったわらじなどとともに焼いた
 りするところもあった。饒別のいろいろな
 いただいた家には、伊勢の土産として貝の笛と
 か、掛軸とか、竹の笛、生姜糖などを買って
 きた。各家では皇大神宮のお札を神棚に供え
 て、今年の豊作と無事を祈った。

ここでは大町市における講として、庚申講
 と伊勢講の二つについて考察してきたが、大
 町の講として特長的であり講の源点とも思わ
 れる「立山講」というのがあある。これはその
 残っている証拠の地蔵尊から今後研究する余
 地が多分にあり、大町の講を語るに欠かせな
 いものである。また機会があればこれについ
 ても究明したいと思う。

(大町市 文化財調査員)

博物館だより

皇族方ご来館

去る9月7日には紀宮様が、また9月16日
 には皇太子殿下がおこしになりました。とも
 に1時間半ほどのご滞在でしたが、紀宮様は
 鳥類に、皇太子殿下は登山史の展示に興味を
 示されたようです。



第一展示室ご覧の皇太子殿下

特別展のご案内

○秋の草花とキノコ展 本展のみ入場無料

9月26日(土)28日(月) 講堂で

秋の恒例の特別展です。野草を使った生け
 花約30点、キノコの標本100点以上展示予定。
 29日(日)は随時受付のキノコ鑑定会(無料)。

山と博物館第37巻第9号

一九九二年九月二十五日発行
 発行所 千歳長野県大町市 TEL020(二一)
 印刷所 大町 山岳博物館
 大町 大糸タイムス印刷部
 定価 年額一、三〇円(送料共)(切手不可)
 郵便振替口座番号 長野四一三二九三